

日英教育学会 公開研究会

2025年2月22日（土）

14:00~15:30

オンライン

2024年総選挙と英国政治

—ポピュリズムに抗するスターマー政権のゆくえ—

講師：今井貴子氏（成蹊大学教授）

司会：佐藤千津（国際基督教大学）

〈事前登録〉

一般の方は以下の「事前登録」ボタンまたは右のQRコードから2月19日（水）までにご登録ください。ZoomのIDをメールでお送りいたします。参加費は無料です。会員の方の事前登録は必要ありません。

<https://forms.gle/NYB4HrDwhTTypazU7>



事前登録

趣旨

2024年7月5日、英国で14年ぶりの政権交代がおきた。保守党が121議席に終わる壊滅的な敗北によって下野した一方、スターマー党首のもとで中道化した労働党は総議席数の63%を占める大勝を収めた。二大政党間で生じた政権交代という事象からは英国政治の常道が辿られたかにみえるが、はたしてそうだろうか。

そもそも新政権の足もとは、大量議席とは裏腹に薄氷である。得票率は単独政権として史上最低、得票数にいたっては惨敗した前回総選挙を下回った。二大政党をみかぎった有権者は、その他の勢力を選択肢とし、多党化が進んだ。躍進を遂げたのは、1923年以来最多の議席を獲得した第三党自由民主党、そして得票率と得票数で第三位となった急進右派ポピュリスト政党リフォームUKである。とりわけ後者は、議席数は5にとどまり、議会で決定力は持ち得ないものの、選挙レベルで脅威となることで、二大政党の政策を自党へと引き寄せる影響力を見せつけている。政治過程そのものが変化の圧力にさらされているのである。じっさい、経済政策では中道左派の立場をとるスターマー政権であるが、移民をはじめ社会文化次元では右派ポピュリズムに引きずられるように保守色をアピールする。こうした意味で、2024年総選挙は英国政治の歴史的な変動を如実に示したと総括すべきであろう。

そこで本報告では、まず2024年総選挙が浮き彫りにした英国政治の転換を読み解くことを試みる。次に、その要因として、英国社会の分断のあり様を経済的次元と社会文化的次元の相互作用の観点から考察する。さいごに、新政権発足後最初の議会演説で「英国の再生」と「ポピュリズムの拒絶」を宣言したスターマー首相のもと、労働党政権は、複合的な制約のなかで、いかなる政策ポジションを取り、どのような舵取りを行おうとしているのかを、信用性[ヴァレンス]（政権を担う「ふさわしさ」の評価）と応答性のあいだのジレンマという観点から考察する。

関連書籍



今井貴子『政権交代の政治力学
ーイギリス労働党の軌跡 1994-2010ー』
（東京大学出版会 2018年）



企画：沖清豪（早稲田大学） 片山勝茂（東京大学） 佐藤千津（国際基督教大学）

日英教育学会

<https://juef.org/>